

富山県福光町

# 梅原胡摩堂遺跡群IV

1997年3月

福光町教育委員会

## 序

本書は県営農道整備事業（田中・梅原線）に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。

この道路は、梅原胡摩堂遺跡内を東西方向に通過しており、改良工事で遺跡が破壊されるおそれがあったため平成5年度から発掘調査を実施しています。

今回の調査では、16世紀後半に梅原に所在した瑞泉寺の分家寺・梅原坊に関連のある、倉庫跡や井戸跡が発見され多くの成果がありました。本書を出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、多大なご協力を賜わりました富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部及び地元住民の方々に多大なご協力を賜わりましたことに対し、深く感謝申し上げます。

平成9年3月

福光町教育委員会  
教育長 石崎栄一

## 例　　言

1. 本書は、県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）に伴う富山県福光町梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成9年7月24日から同年9月3日までである。調査面積は900m<sup>2</sup>である。
2. 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長加藤仁が調査事務を担当し、生涯学習課長西村勝三が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター　主任　久々　忠義  
福光町教育委員会　主事　佐藤　聖子

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各文末に記した。

4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。  
太崎　勇・林　敏三・前田敏久・前原裕志・吉田敏信（五十音順・敬称略）  
金森淑子・西川和美・山村恵子（遺物整理作業員）
5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

## 目　　次

I 位置と環境	1	V 付論	7・8
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第4図 遺構配置図	9・10
II 調査に至る経過	2	第5図 遺構(1)	11
第1表 遺跡の概要	2	第6図 遺構(2)	12
第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置	3	第7図 出土遺物(1)	13
III 調査の概要	4	第8図 出土遺物(2)	14
1. 調査の経過	4	図版1 検出遺構(1)	
2. 調査の方法	4	図版2 遺構(2)	
第3図 梅原胡摩堂遺跡	4	図版3 遺物(3)	
3. 梅原胡摩堂遺跡12地区的概要	5・6	図版4 遺物(1)	
IV まとめ	6	図版5 遺物(2)	
参考文献	6	図版6 遺物(3)	

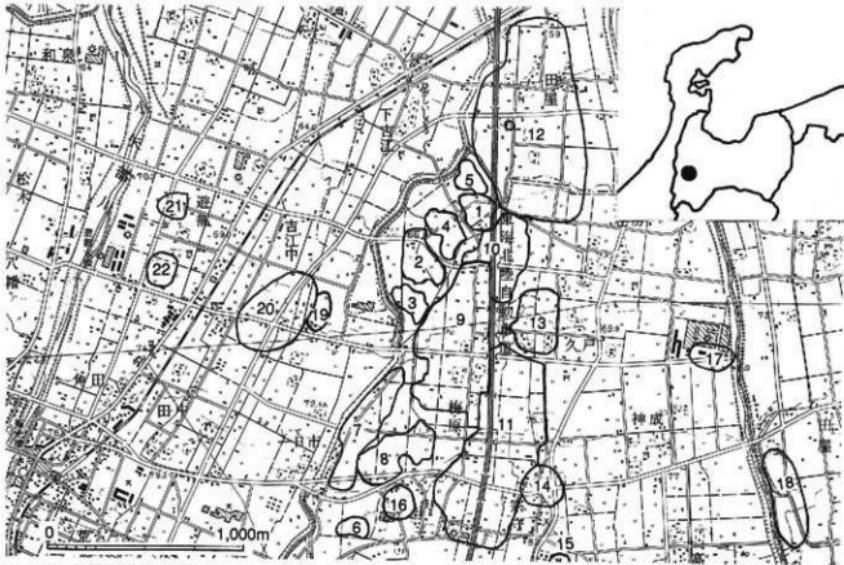
## I 位置と環境

梅原胡摩堂遺跡は、富山県福光町梅原地内に所在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部に位置し、県境には、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたといわれる医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

本遺構は、小矢部川の支流である大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する。標高70～80m前後を測る周辺には、梅原安丸・梅原出村・梅原落戸・梅原上村・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡が密集している（第1図参照）。梅原安丸・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際発掘調査が行われ、12世紀中頃から18世紀にかけての大集落跡が発見された〔富文振1994〕。この南後方には、うずら山・宗守・竹林I・竹林II・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡が存在する。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区からは弥生時代中期の土器・菅玉・石鎚が出土し、梅原安丸Ⅲ遺跡では古墳時代の竪穴住居跡1棟を検出しており〔福光教委1991・1994〕、原始時代から今日まで連續と人々が生活していたことがわかる。

文献史料では、古代には福光町の一部が砺波郡川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村とよばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺額石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家寺である梅原坊があった。

（佐藤聖子）



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原安丸遺跡
2. 梅原安丸Ⅱ遺跡
3. 梅原安丸Ⅲ遺跡
4. 梅原安丸Ⅳ遺跡
5. 梅原安丸Ⅴ遺跡
6. 梅原出村Ⅱ遺跡
7. 梅原出村Ⅲ遺跡
8. 梅原上村遺跡
9. 梅原落戸遺跡
10. 梅原加賀坊遺跡
11. 梅原胡摩堂遺跡
12. 田尻遺跡
13. 久戸遺跡
14. 宗守遺跡
15. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
16. うずら山遺跡
17. 久戸東遺跡
18. 田屋川原古戰場
19. 田中遺跡
20. 仏道寺跡
21. 遊部城跡
22. 常楽寺跡

## II 調査に至る経過

平成元年（1989年）、21世紀に向けての大型農業に対応する為、遺跡の所在する梅原地区において「低成本化水田農業大区画は場整備事業計画」が策定された。しかし、東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査から、同事業計画地内には遺跡の広がりが懸念された。この事から、町教育委員会は、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、平成元年度及び2年度に事業計画地内の遺跡分布調査を実施したところ、広範囲において遺物の散布地を確認した。さらに、同2年度には国庫補助を受けての試掘調査を実施。遺跡の範囲確認を行い、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた結果、遺跡の大半は盛土を行う事で水田下に保存し、一部の面工事・農道建設・排水部分について本調査を実施する事となった。

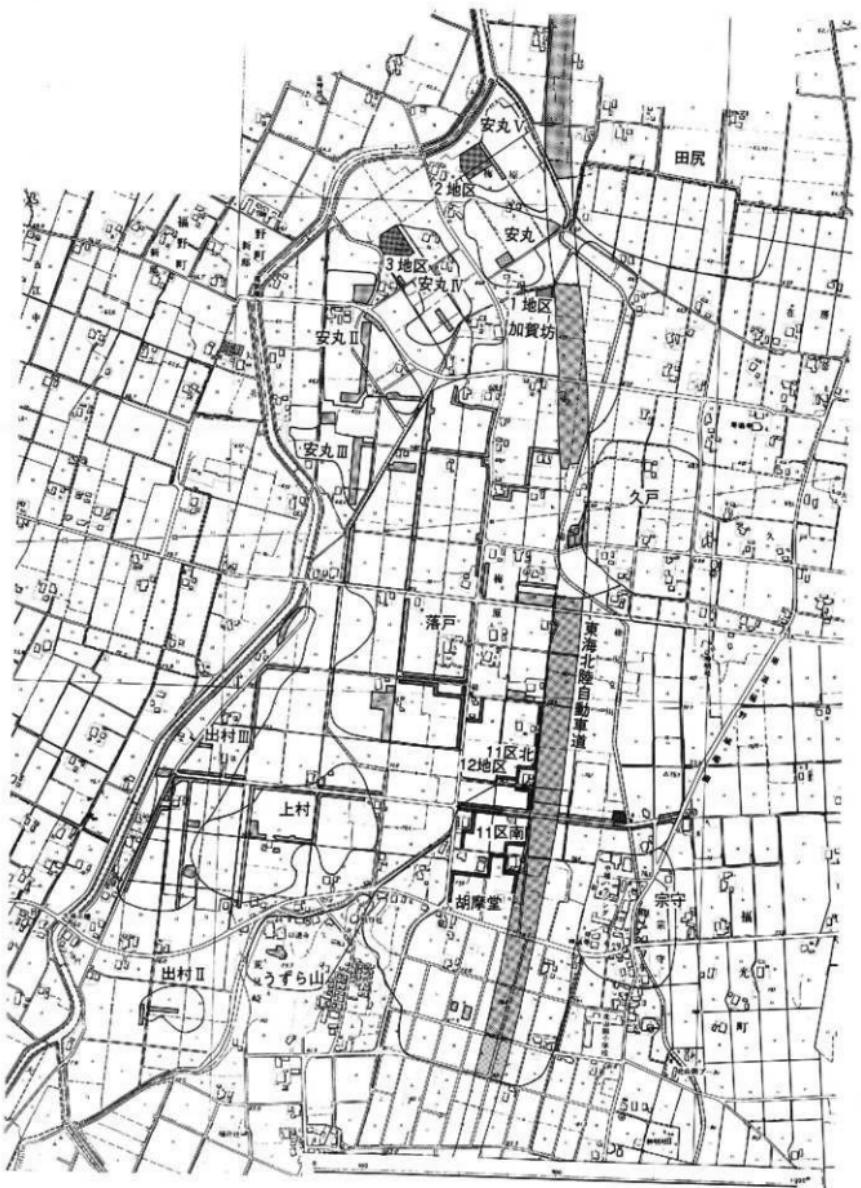
県営農道田中・梅原線は、同事業計画地域内の南側に位置する。同事業に伴い、4m幅の既存の現道を7m幅に拡幅する事となつたが、当農道部分にも遺跡の広がりが確認された。その為、平成3年度の協議を経て、平成4年度より本調査を実施してきた。今年度は、東海北陸自動車道から西に70mの部分で調査を行つた。

これまでに本調査を実施した面積及び対象遺跡は、次のとおりである。

本調査対象遺跡		面積	
平成4年度	梅原出村Ⅲ遺跡・梅原上村遺跡	計750m <sup>2</sup>	
平成5年度	梅原上村遺跡・梅原胡摩堂遺跡	計1,100m <sup>2</sup>	
平成6年度	梅原胡摩堂遺跡	計960m <sup>2</sup>	
平成7年度	梅原胡摩堂遺跡	計900m <sup>2</sup>	(佐藤聖子)

第1表 遺跡の概要

No.	遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
7	梅原出村Ⅲ	旧石器、縄文（前・後・晩・中期？）、古墳、古代～中世、近世、近代	柱穴、穴、壁穴住跡、溝、井戸、遺物包含層（縄文・古代）	繩文土器・石器、須恵器（墨書き土器）、上部器、土師質土器、珠洲、越前、陶磁器、銅貨
8	梅原上村	縄文（中・後期）、古代～中世、近世	柱穴、穴、溝、遺物包含層（古代）	繩文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲、越前、八尾？、陶磁器、占鉢、石臼
11	梅原胡摩堂	縄文（後・晚期）、弥生、古墳、古代、中世、近世	穴、遺物包含層（弥生）、獨立柱建物、溝（古代）、井戸、溝、穴（中世）、柱穴、穴	繩文土器・石器、弥生土器、石器、斧玉、利刀（弥生）、須恵器、上部器、灰釉陶器（古代）、土師質土器、珠洲、越前、輸入陶磁器、鉛石、石臼、石鍋、瓮口、茶臼、香炉の足、擦器、木製品、竹片、陶磁器（中・近世）



第2図 遺跡の範囲と調査区位置図（1万分の1）

### III 調査の概要

#### 1. 調査の経過（第2・3図）

今回の調査地区は、東海北陸自動車道の西側で、昨年度調査の10地区に東側で隣接する。12地区とした調査地区は、現道路下と拡幅部分を含む。調査面積は、900m<sup>2</sup>である。なお、今回で本事業の調査は終了した。

#### 2. 調査の方法

調査はまず最初に、現道路においては舗装面とその路床・旧表土の除去を、拡幅部分においては耕作土の除去を重機で行った。その後、調査区にあわせて、およそその東西方向・南北方向に基準杭を10mごとに設置し、調査区割を行った。調査区割は、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層掘削・造構検出・造構掘削等は調査員及び作業員を行い、造構平面図の作成は、ラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化した。



### 3. 12地区の概要

#### (1) 地形と層序（第3図、第4図）

12地区は、現農道部分とその南北に広がる水田部分から成っている。調査区西側境から西が崖になっており、調査区は河岸段丘上の端にあたる。そのため、地形は東から西へと緩やかに傾斜しており、海拔は約74~75.5mである。地山面までの深さは約40~60cmである。現道路下のY15から西側部分は地山下まで削平されており、遺構は検出されなかった。基本土層は、①層：暗オリーブ褐色土（現代の耕作土）、②層：黒褐色砂質土、③層：黒褐色粘質土である。部分的に①層と②層、②層と③層の間に黄色粘土質の盛土が混じる。

#### (2) 遺構（第4~6図、図版1~3）

中世の土坑13、井戸13、溝11、ピット14がある。

#### A. 中世

##### 土坑SK01~13（第5・6図）

SK01は調査区東端にある。南北6.5m×東西4.5m、深さ20~30cmの方形の堅穴状土坑である。その掘方北側にSE06・08、南側にはSE10・12と直径60~90cmの円形の素掘り井戸を伴う。また東側にP15、西側にP16を伴う。P16には直径約14cmの柱根が、P15には約16cm四方の杭が残っていた。出土遺物には、瀬戸美濃・天目茶碗、同・鉄軸皿、土師器破片がある。これらの遺物から、16世紀前半の遺構とみられる。また、SE06から石鉢。茶臼、SE08からは床板らしき木製品が出土している。SK02は、SK01の西側6mのところにある。一辺3m四方の正方形に近い土坑であるが、東側を擾乱により破壊されている。出土遺物には土師器破片があるが、時期は特定出来ない。

SK03は調査区中央東寄りに位置する。南北2.5m×東西3.3m、深さ8~10cmである。東側をSD07が通過している。出土遺物には白磁・皿があり、15世紀後半から16世紀の遺構と思われる。SK04はSK03の北に50cmを隔てたところにある。北側が調査区外まで伸びているため全容はわからないが、東西3.3m×南北4.5m以上、深さ10~30cmである。北西角に直径80cmの井戸・SE01を伴う。出土遺物には瀬戸美濃・天目茶碗がある。また、SE01からは土師器皿、床板が出土している。SK05はほぼ調査区中央に位置する。南北2.5m×東西1.5m、深さ約10cmの南北に細長い方形の土坑である。出土遺物はない。

SK06・07はY19~20間の北側に位置する。それぞれ北側半分が切れているため、全容はわからない。SK06からは土師器皿、瀬戸美濃・壺、SK07からは越前の壺が出土している。その西側約7~17mの間にSK08・09が隣接して位置する。両方とも南側が削平され、北側が調査区外に伸びているため、全容はわからないが、SK01と似たような規模の土坑と思われる。SK08がSK09を切り込んでいる。SK09は、直径1mで方形に近い形をしているSE04を伴う。SK08からはキセルが、SK09からは茶臼が出土している。SE04の遺物には、土師器・すり鉢、箸などの木製品がある。

SK11・12はSK01と南側で接する。北側半分はともに調査区外に伸びている。SK11は直径約70cm、深さ約3mのSE09、直径約60cm、深さ約2.9mのSE13を伴う。SK11・12ともに出土遺物はないが、SE09からは、桶の底板とおもわれる木製品が出土している。SK13は東側でSK01と、西側でSD08と接している。

##### 井戸SE02・03・05・07（第5図）

SE02は調査区中央南側に位置する。直径約1m、深さ約90cmではほぼ丸い形をしている。出土品には、下駄がある。SE03は、SE02の北東1mのところにある。直径約50cm、深さ約85cmで、出土遺物はない。SE05はその西側3mのところにある。直径約80cmの円形である。出土遺物には、土師器、越中瀬戸、越前がある。SE07はY40列付近に位置する。直径が約1.5mの円形で、深さ約1mである。今回の調査で検出した井戸の中では、一番大型のものである。箸や建築部材が出土している。

### 溝SD03～05・08（第6図）

SD03・04・05は調査区東より、Y32～35列の間に南から北に3列並んでいる。南北約1m、東西5～6m、深さ10～24cmの溝である。出土遺物はない。（佐藤聖子）

#### （3）遺物（第7・8図、図版4～6）

縄文時代・奈良・平安時代・中世・近世のものが整理箱（長さ65cm幅40cm深さ10cm）で4箱出土した。

##### A. 縄文時代（図版4上）

打製石斧がある。

##### B. 奈良・平安時代

SE10より須恵器・壺の体部破片が出土している。

##### C. 中世

###### SK01・03・04・06・08（1～6）

1・2（SK01）は瀬戸美濃である。1は天目茶碗、2は鉄釉皿で、時期は16世紀前半である。3（SK03）は白磁・皿である。時期は15世紀後半から16世紀初頭にかけてである。4（SK04）・5（SK06）は瀬戸美濃で、4は天目茶碗、5は瀬戸美濃の蓋である。6は（SK08）はキセルである。

###### SE01・02・04・05・06・07・09（7・11・14・22・23・25・26・27・29）

7（SE01）は土師器・皿である。15世紀後半である。11（SE05）は越前・壺の口縁部である。16世紀中頃か。14（SE04）は土師器・すり鉢である。22（SE09）は桶の底板である。  
23（SE07）は箸である。25（SE02）は下駄である。26（SE01）は床板である。27は茶臼、28は石鉢である。ともにSE06出土である。16世紀前半か。

###### SD08・09（8・9・10）

8はSD09出土の土師器・灯明皿である。口縁部内外面に煤が付着している。9はキセルの吸口、10は越中瀬戸・すり鉢である。ともに、SD08出土である。

###### P 6・12・13（12・13・20・21）

12・13は土師器・皿である。12はP 6出土で口縁端部を尖らせている。13はP 13出土である。底部に糸きり痕を残す。20・21は桶の底板である。20は側辺にくぼみがあり、表裏面ともに10近くの穿ったあとがある。

###### 包含層（15・16・17・18・19）

15は越前・壺の口縁部である。16世紀前半である。16は土師器・鉢である。17・18は瀬戸美濃である。17は天目茶碗の底部で緑灰釉が付着していた。18はすり鉢の口縁部である。16世紀中頃とみる。19は青花の皿である。24は箸である。

## IV まとめ

今回調査をした地区においては掘立柱建物は検出されず、底の浅い竪穴状の土坑に井戸が伴うというパターンの遺構が多かった。昨年度調査の10地区においては、40近くの井戸が検出されたものの単発で出土したものが多く、掘立柱建物に伴うもの、竪穴状土坑に伴うものは少なかった。出土遺物には、天目茶碗、茶臼などの茶に関連したものも多い。これらは、この地区遺構の特殊な性格を物語る。今回検出された遺構も、16世紀前半の瑞泉寺の分家寺である梅原坊に関連したものであり、居住地域というよりもそれに伴う作業場的役割を果していた地域と考えられる。

（佐藤聖子）

## V 付論

### 梅原胡摩堂遺跡の性格について

久々 忠義

梅原胡摩堂遺跡は、小矢部川と山田川との間にある河岸段丘の先端部に位置する。南北約100mの遺跡であるが、そのほぼ中央に比高差約2mの段丘崖があり、その北部と南部では、遺跡の形成時期に大きな違いがある。すなわち、北部では12~14世紀代の遺構が主体であり、南部では15~17世紀代の遺構が主体である。

筆者は、南部の遺構を寺内町ではないかと考えている。寺内町というのは、戦国時代に、浄土真宗などの寺院が寺域を堀や土居などで防備した宗教城塞都市のことである。寺のまわりには、職人や商人も住む町も形成された。県内における寺内町としては、小矢部市安楽寺御坊、高岡市勝興寺、城端町善徳寺などが知られているが、梅原についてはそのような伝承がなく、これまで寺内町としてとり上げられることはなかった。

梅原には16世紀代に「梅原坊」という寺院が存在した。初代は賢勝で、この人は瑞泉寺5代賢心と兄弟である。2代は賢春である。賢春の子賢従は1593年と1604年の間に越前大野へ移り教願寺と号した。2男賢恵は加賀宮腰へ移り本龍寺と号した。賢春は1555年60歳で没しているので、梅原坊は、おそらく16世紀に入って成立し、16世紀末の廃絶までのおよそ100年間、梅原に存在したと考えられる〔金龍1994〕。瑞泉寺は、越中一向一揆の総帥として、1481年時の領主石黒氏との戦いに勝ち、16世紀後半には、上杉謙信や佐々成政・前田利家ら戦国大名との戦いの中心であった。梅原坊は、山田川以西における一向一揆の拠点であったものと考えられる。

梅原胡摩堂遺跡では、東海北陸自動車道の建設や県営は場整備事業および農道拡幅工事に伴い、平成元年より継続して発掘調査が行われている。調査の結果、遺跡南部は、第1図に示したように、ほぼ北に対して約15度東に傾いた方向とそれに直交した幅3~4.6m深さ0.5~1mの溝で区画されている。溝のなかにはL字形に屈曲するところがあり、防備を固める意図が感ぜられる。南には幅約3mの道路とみられるところもある。区画溝などの遺構のあり方と地形などから、町の範囲は、北と西は段丘崖が境で、東は権現堂川とその左岸に形成された高さ2.5mの自然堤防が境となろう。南は区画溝が約10度東に傾いて調査区外へ延びておりその先は今の所不明であるが、調査区南方の試掘では関連する遺構は発見されていないから、あまり南へ広がることはないと想われる。そのようなことから、町の広さは、おおよそ南北700m東西約300~400mであったと考えられる。この大きさは、16世紀前半代に本願寺一家衆の今井兵部が今井御坊を中心として建設した大和今井寺内町の東西500m南北280mの大きさを上回る広さがある〔玉井1993〕。

梅原坊の位置については、現在安楽寺跡とされている前の以速寺あたりと考えられる。このあたりの堀が最も広い。このあたりの字名が大門と寺家であることも関連があるのかもしれない。

出土遺物には、東海北陸自動車道部分の調査では、直接的に寺と関係づける遺構や遺物はないが、茶筅などの茶道具の出土は、茶をたしなむ上層階層の存在を示す。茶臼の多いことも特徴である。また、製銅・製鉄遺構の存在は鍛冶職人の存在や仏具の鋳造に関わるものであろう。農道部分の調査では、銅製と鉄製の香炉獸脚が出土している。この西方800mの大井川沿いにある梅原出村Ⅲ遺跡では、16世紀代とみられる瓦器仏具や「開山」と墨書した土師器が出士した。ロクロ土師器は16世紀代のものと考えられるから開山は賢勝である可能性が高いとみる。

梅原胡摩堂遺跡から出土する中世土師器には、ロクロで成形されたとみられるロクロ土師器と手づくねで成形されたとみられる手づくね（非ロクロ）土師器がある。ロクロ土師器は、口縁部が直線的に開き、口縁端部でわずかに内湾するものが多いが外反するものもある。底部には糸切り痕を残し、大型のものは底部の糸切り痕をヘラケズリで消すものがある。1980年代中頃以降、県西部の発掘調査では、ロクロ土師器の発見が増えている。婦中町蓮花寺、同友坂、高岡市石塚、井口村井口城跡、砺波市秋元、小杉町白石、福光町梅原安丸、同梅原出村、同梅原胡摩堂、婦中町

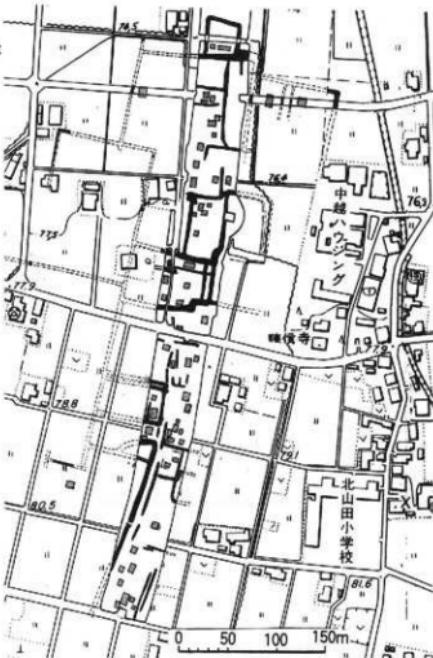
小倉中畠、氷見市阿尾島尾A、高岡市伏木勝興寺地区、福岡町石名田木舟、婦中町清水島IIなどの遺跡があげられる。それまで行われていた中世後半の遺跡では、出土する土器類はほとんどが手づくりのものであった。そのため、ロクロ土器は古い様相とみられ中世前半に位置づけされることがあった。しかし井口遺跡でまとまった発見があつてから、伏木勝興寺地区の近世に位置づける例があるけれども、15世紀後半に位置づける人が多い。梅原胡摩堂遺跡でもロクロ土器の出土が多い。筆者は、寺内町の形成を16世紀とみるから、ロクロ土器は16世紀代にも用いられていたと考えるが、15世紀後半とされるロクロ土器との区別がむつかしい。15世紀後半とするものに、16世紀に入るものがあるのではないかと考える。

中世土器について、宇野隆夫氏や宮田進一氏は、ロクロ土器は東国系非ロクロ土器は京都系とし、越中では非ロクロ土器が主流でありロクロ土器は東国に近い北陸東部の地域性をあらわしているとする〔宇野1986・宮田1995〕。現状では砺波地方ではロクロ土器の占める割合が多い。その分布は浄土真宗の勢力圏と重なるようにも見受けられる。一向一揆さかんな頃であり、在地的な技術の見直しと復活が計られたのかもしれない。

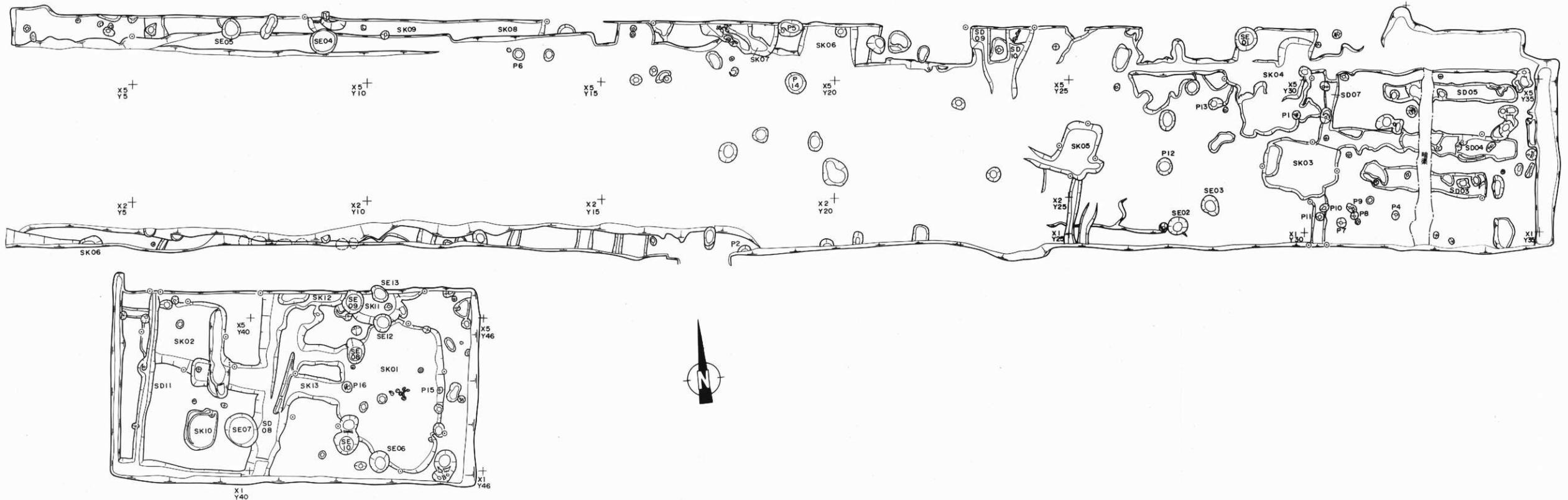
1573年頃、城端に善徳寺が移り、梅原にあったと考えられる市も城端へ移った。都市的機能の喪失が、梅原寺内町衰退の原因のひとつであったのであろう。

#### 参考文献

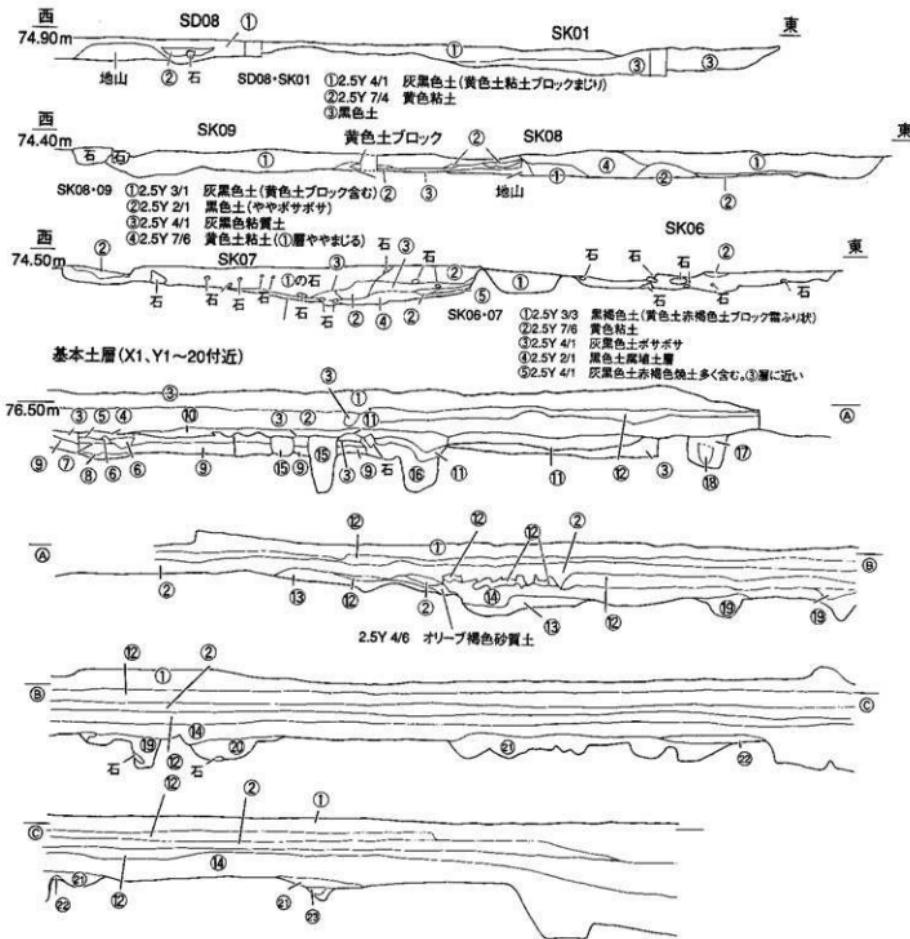
- 金龍教英1994「梅原坊」「富山県大百科事典」  
玉井哲雄1993「都市の計画と建設」「岩波講座日本通史第11巻」  
財団法人富山県文化振興財团 理成文化財調査事務所1994「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」  
同上1996「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」  
宇野隆夫1986「越中弓庄城跡の土器類」大境第10号  
宮田進一1995「各地の土器様相 北陸」「概説中世の土器・陶磁器」



第5図 堀と建物の配置 黒塗り箇所は堀(破線は推定)網点は建物

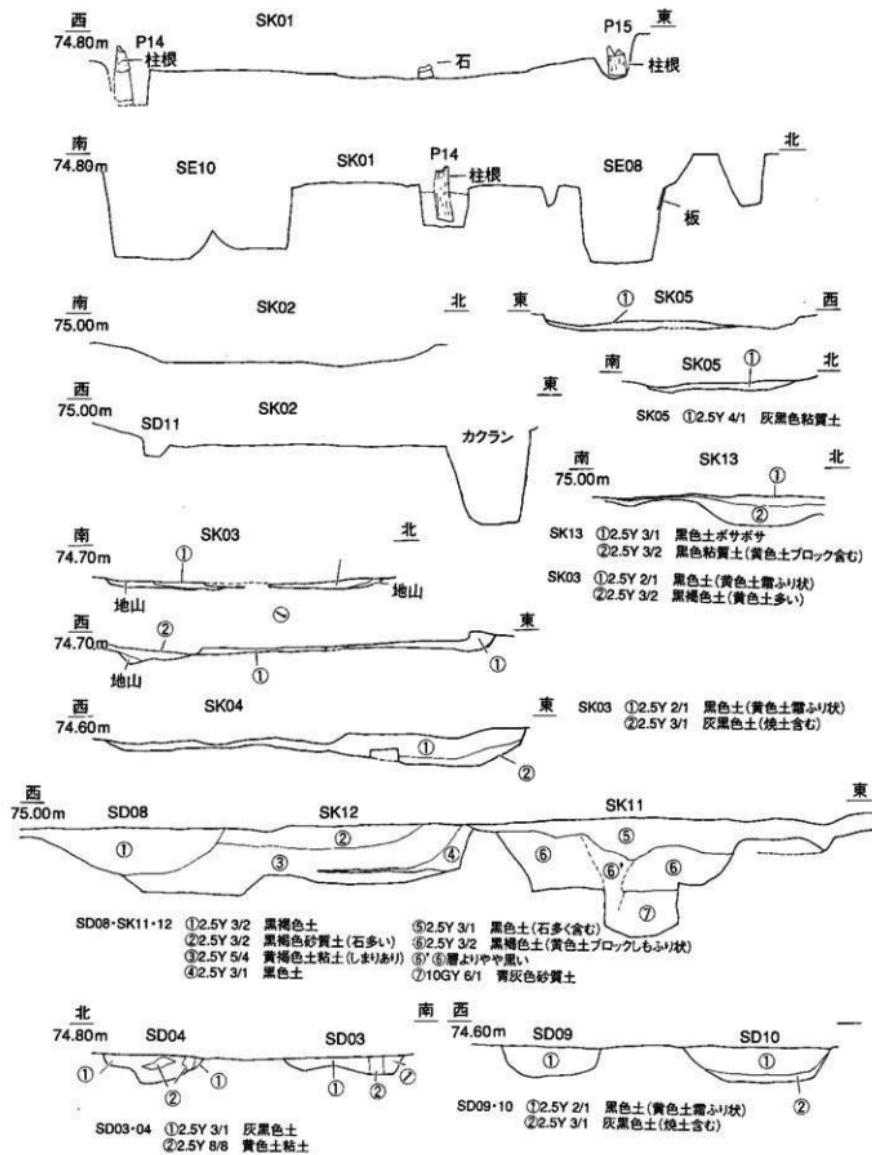


第4図 遺構配置図(1:100)

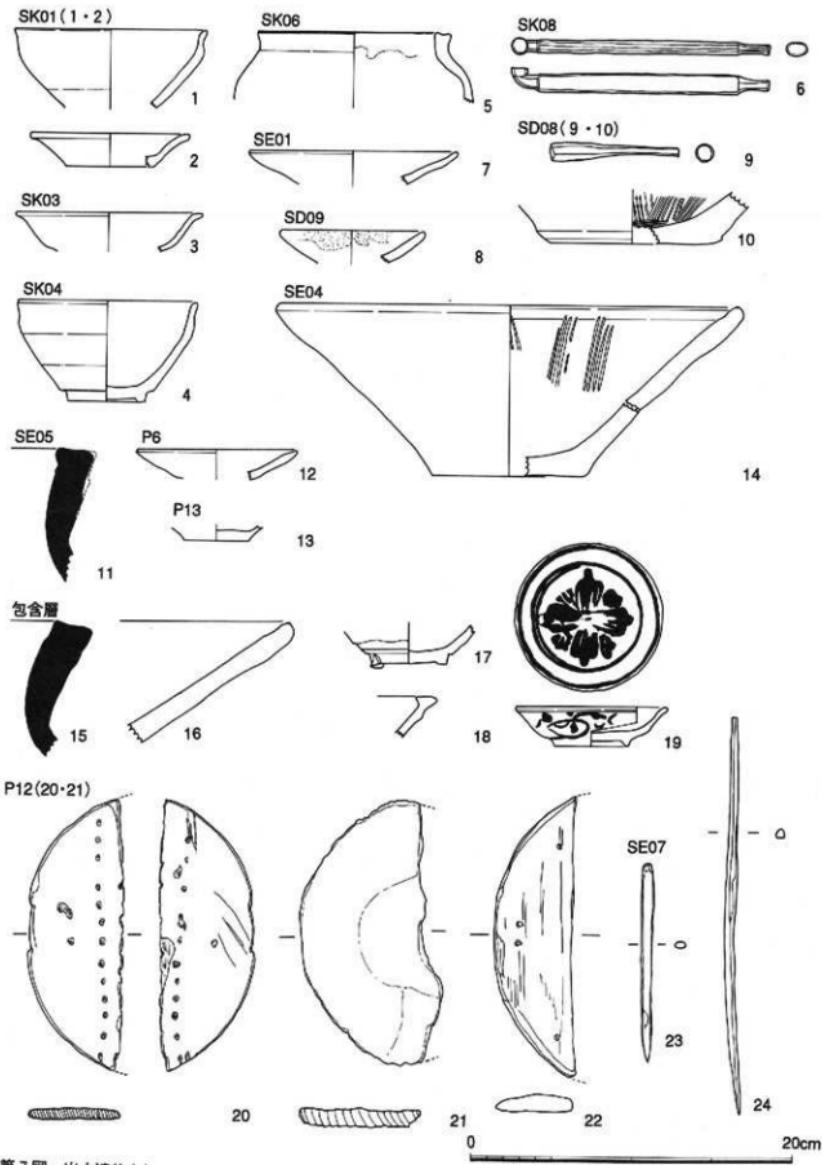


基本土層 ① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色土=耕土	⑬ 2.5Y 3/1 黒色粘質土
② 2.5Y 3/1 黑褐色砂質土	⑭ 2.5Y 3/1 黑褐色粘質土
③ 2.5Y 5/4 黄褐色粘土(橙色をおびている)=地山	⑮ 2.5Y 3/1 小石混り黑褐色粘質土(5/4 黄褐色粘土まじり)
④ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色ブロックまじり黒色砂質土	⑯ 2.5Y 3/1 黑褐色砂礫
⑤ 2.5Y 5/4 黄褐色土(2/1 黑色土まじる)	⑰ 2.5Y 4/1 黄褐色砂質土(2/1 黑色土多い)
⑥ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色土	⑲ 2.5Y 4/1 黄褐色土(5/4 の土まじる)
⑦ 2.5Y 2/1 黑色粘質土(5/3 黄褐色土まじる)	⑳ 2.5Y 4/1 黄灰色粘土(3の土まじる)
⑧ 2.5Y 3/2 黑褐色粘質土	㉑ 2.5Y 2/1 黑色土(鉄分有)
⑨ 2.5Y 4/1 黄褐色砂礫	㉒ 2.5Y 1/1 に嵌がまじる
⑩ 2.5Y 3/2 黑褐色粘質土(4/2 暗黄褐色土まじり)	㉓ 2.5Y 4/2 暗灰黄褐色砂礫土
㉔ 2.5Y 4/1 黄褐色砂質土(地山の土嚢ふり状にまじる)	㉕ 2.5Y 1/1 に嵌がまじる
㉖ 2.5Y 5/4 小石混り黄褐色粘土(3/1 黄褐色土まじり)=盛土	

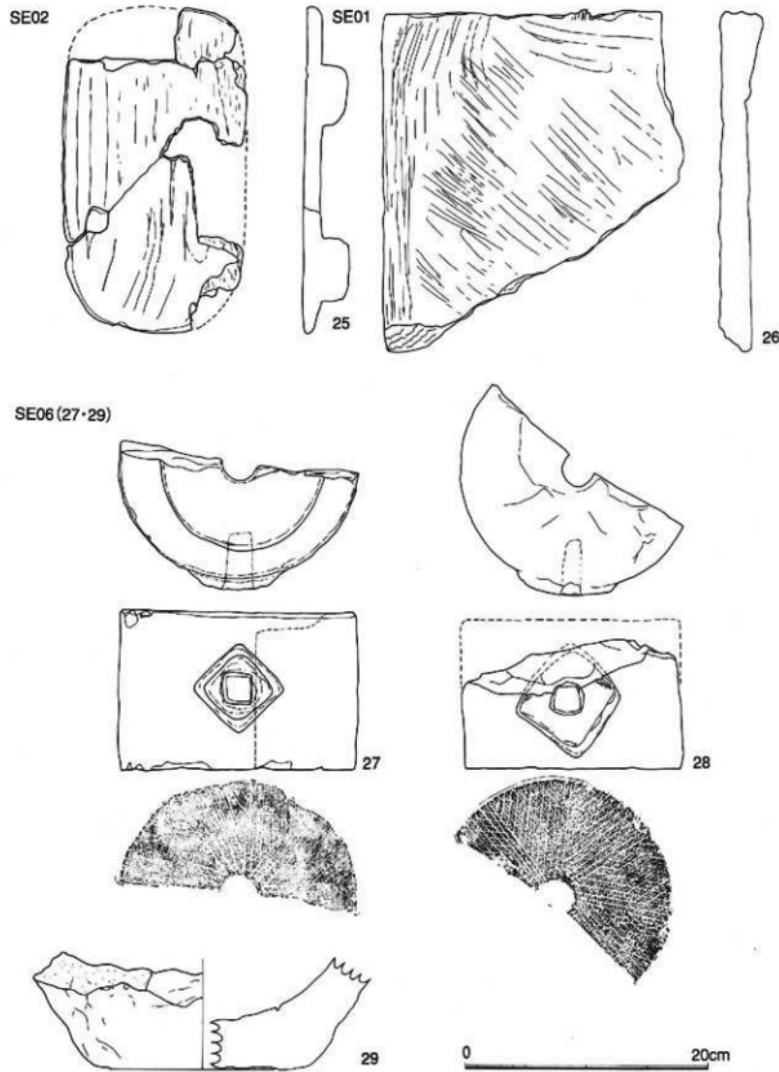
第5図 遺構図(1)



第6図 遺構図(2)



第7図 出土遺物(1)

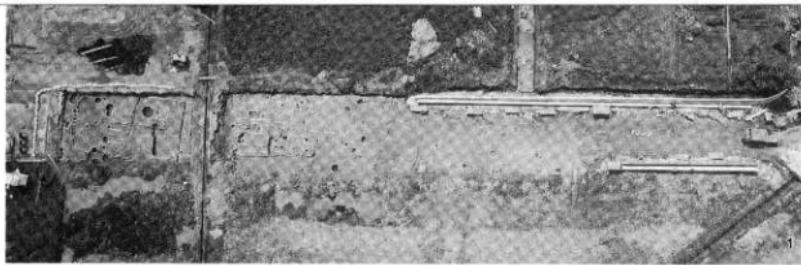


第8図 出土遺物(2) (25は1/3、26~29は1/4)

# 図版1

遺構(1)

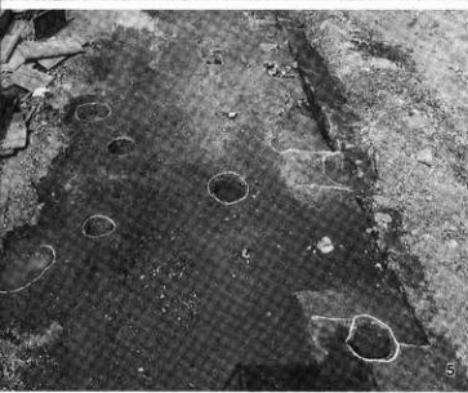
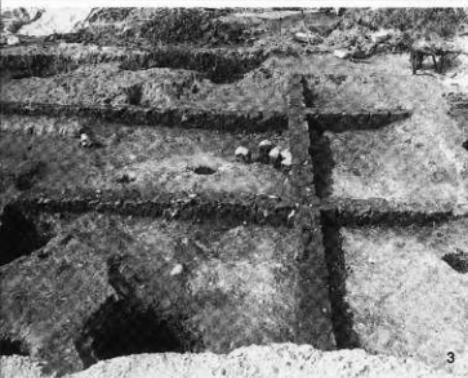
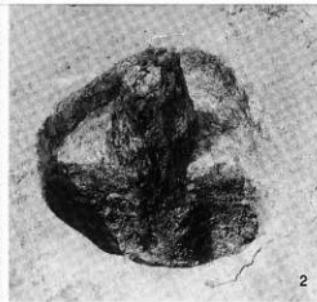
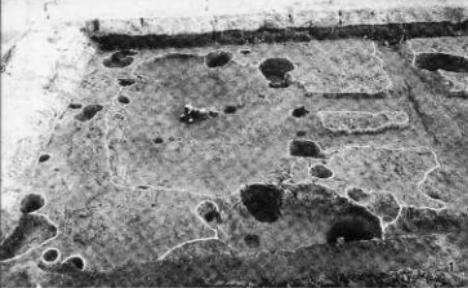
1. 全景(上空から)
2. 全景(東上空から)
3. 全景(西上空から)



図版2

遺構(2)

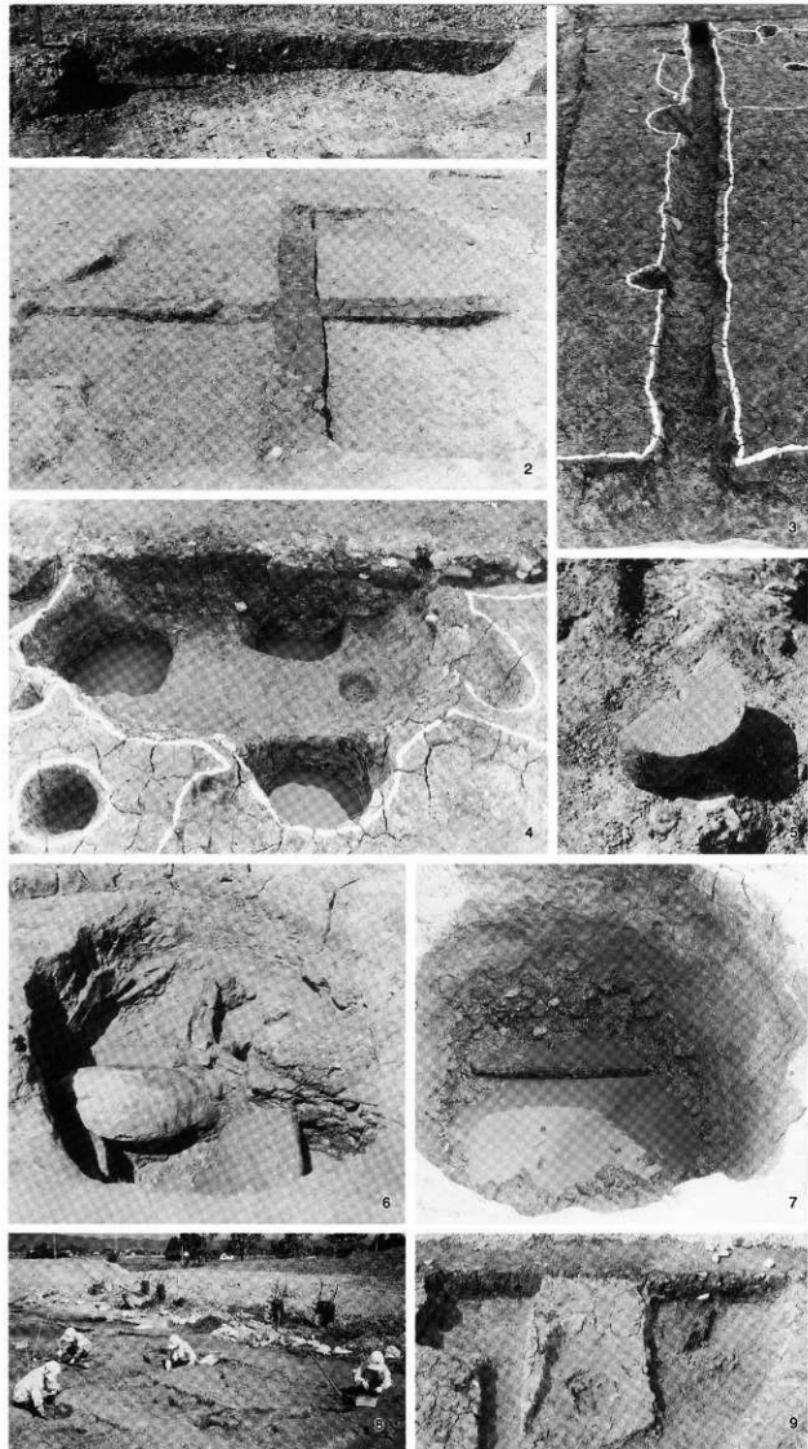
1. SK01 (北から)
2. P16柱根
3. SK01土層  
(南から)
4. X5・6Y3～22  
(東から)
5. SK06・07・P14  
(東から)
6. SK04天目茶碗  
出土状況
7. X5・6Y3～20  
(西から)
8. 土層



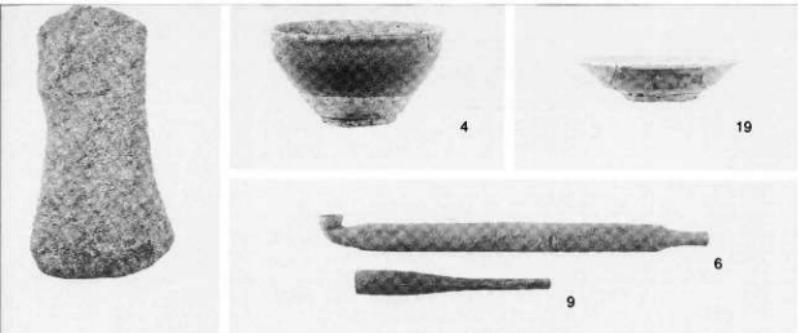
### 図版3

遺構(3)

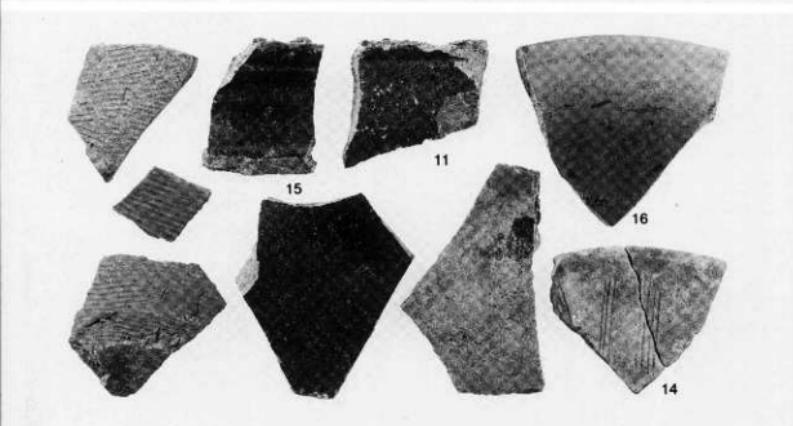
1. SK06 (南から)
2. SK03 (東から)
3. SD11 (南から)
4. SK11・SE09・12・  
13 (南から)
5. 茶臼出土状況
6. SE05 (南から)
7. SE07 (北から)
8. 発掘作業風景
9. SD14・15  
(南から)



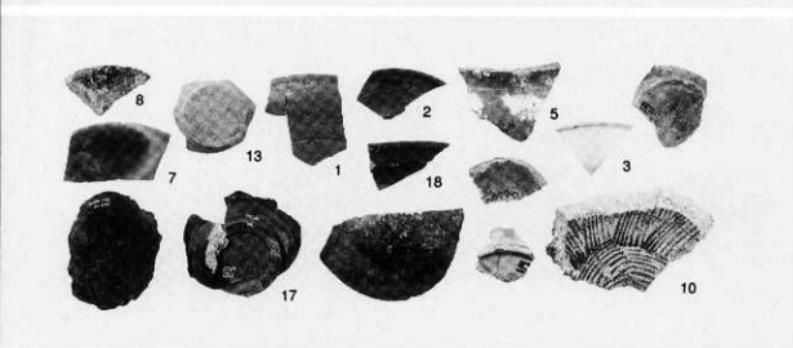
図版4  
遺物(1)



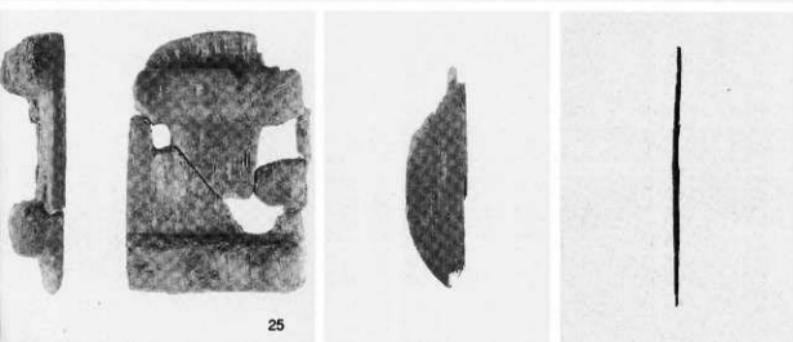
打製石斧 (1:3)  
瀬戸美濃 (1:3)  
青花 (1:3)  
キセル (1:2)



須恵器・越前・土師器  
(1:3)



土師器・瀬戸美濃・越  
中瀬戸・白磁 (1:3)



下駄 (1:4)  
桶底板 (1:2)  
箸 (1:4)

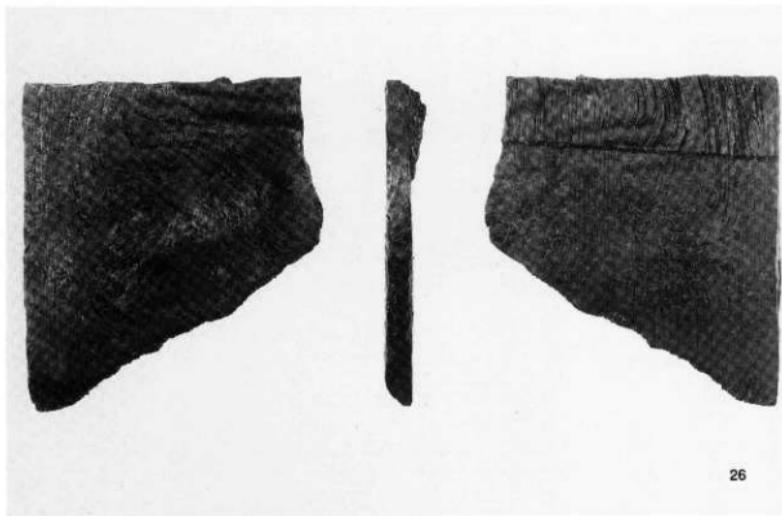
圖版5  
遺物(2)



桶底板 (1:3)  
桶床板 (1:3)  
板 (1:3)

20

21



床板 (1:4)

26



柱 (1:5)

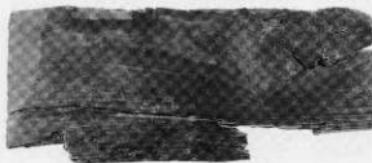
圖版6  
遺物(3)



22



桶底板 (1:3)  
板 (1:3)  
棒 (1:3)



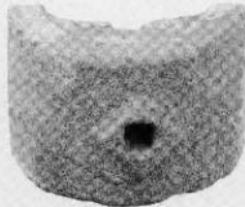
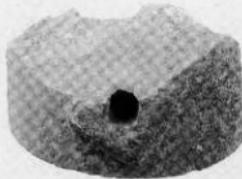
23



29



板 (1:4)  
箸 (1:4)  
石鉢 (1:4)



28

27

茶臼 (1:4)

## 報告書抄録

ふりがな	ふりがなふりがなふりがなふりがなふりがなふりがなふりがなふりがな							
書名	富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群IV							
副書名	県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(5)							
編著者名	久々忠義、佐藤聖子							
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒939-16 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763) 52-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'	°'			
梅原胡摩堂	富山県 福光町梅原	16421	180	36度33分30秒	136度54分30秒	19960724 19960903	900m <sup>2</sup>	県営一般 農道整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
梅原胡摩堂	集落	縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世		堅穴、井戸（戦国時代）	打製石斧、須恵器、珠洲、越前、瀬戸美濃、土師器、青磁、白磁、青花、下駄、曲物、箸、柱根、桃核、茶臼、石鉢			

県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）に伴う  
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(5)

### 富山県福光町 梅原胡摩堂遺跡

平成9年3月28日

編集 福光町教育委員会  
富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

印刷 研波印刷

